

パラナ通信 # 8 -2021 年春-

総評 (2021 年 JPIP-A)

翻訳監修者 真鍋 俊明

『どうやら「病理診断は AI に取って代われ、解剖だけが残る」という将来的なイメージがあるようで、学生勧誘の場面で「病理なんて将来性がない」、「解剖だけの病理には魅力がない」という話を耳にしました。その度に、そんなことはないかと反論してきましたが、その根拠を示せ！と言われると私自身も心もとないのが実情です』と、今年の春ごろある現役の病理学教授からメールを頂戴し、夏には学生向けの講演会でお話することになりました。実際、世界各国でこの問題が提起されているようで、すでにアメリカでは、病理診断を担う病理医の頭の中を俯瞰するような AI は未来永劫に作ることは出来ないという宣言が出され、日本病理学会も 2021 年 8 月 17 日付の「人工知能 AI と病理医について」と題するステートメントを、病理医を目指す若い人たちへ向けて発信しました。

近々、病理 AI に関する様々な情報を提示し、開発者、利用者ともにどうあるべきかとの指針を盛り込んだ「病理 AI ガイドライン」なるものが日本病理学会から出されることになっていると聞いています。人工知能が人間の知能を超えるシンギュラリティ（技術的特異点）の時を 2045 年には迎えるとの予想もあって、その是非を含め将来どのような社会を作っていくべきかの議論が盛んになっているようです。この総評でも、3 年前、病理診断 AI に関して話題にしたことがあります。また、私事ですが、昨年“あいみつく”という雑誌に「遠隔病理診断ネットワークにおける AI による診断補助導入の可能性と展望」と題して病理 AI にはどのようなものがあるか、その現状と将来展望について少し書かせて頂きましたので参考にして頂ければ幸いです。論文自体は、

<https://www.palana.or.jp> に接続して頂ければ、読んで頂くことが可能です。

いずれにしても、現在この総評を読んでもらっている先生方が現役の間には、AI がいろいろな過程で手助けをしてくれることはあっても、病理医に取って代わることはないようです。言い換えれば、地道に J-PIP を利用しながら、研鑽を積んでいかないと、我々病理医としての能力は日増しに衰えていくことはあっても向上することはない、病理業務は回らず、引いては患者その他の方々に迷惑をかけることになってしまう、そしてその迷惑を被るのは我々自身であるということになるのでしょうか。

(JPIPA 2021 総評のエッセーから引用)